

研究代表者 所属・職：経済学部・教授

氏 名：曲田 浩和

研究課題名：新田開発地の歴史資源の活かし方ー川南新田の歴史発見ー

### 研究の目的

川南新田は嘉永4年(1851年)に大里村の神野源兵衛が開発した新田であり、別名として源兵衛新田とよばれている。川南新田の歴史的経過を明らかにすることで、地域資源の性格を明らかにし、地域の人々に関心を持ってもらい、この地域の活用を考えることを目的とする。とくに新田は代々所持をしている人はいても居住者がいる地域ではない。川南新田に居住し始めたのは最近のことであり、近年はマンションなどが建設され、急激に人口が増加している。今回の調査で得られた事実が、大里村に古くから住む人々と旧大里村の地先の川南新田に移り住むようになった新住民の共通の話題になればよいと考えている。

### プロジェクト目標の達成状況・成果内容

まず、川南新田が大里村の神野源兵衛が開発した新田であり、別名として源兵衛新田とよばれているが、同時に「徳川様の新田」と地元で親しまれていることについて、その原因を明らかにした。その前に川南新田が「徳川様の新田」とよばれていることについて、東海市の歴史講座(渡内地区、上名和地区、下名和地区、荒尾地区、横須賀地区、加木屋地区)を使って調査したが、まったく知られておらず、「徳川様の新田」とよんでいるのは大里に住む人たちの可能性が高いことがわかった。「徳川様の新田」とよばれる原因は、「川南新田に関する一件書類」(徳川林政史研究所所蔵)に、明治10年、神野源兵衛が徳川家への年貢を滞納しており、その代わりとして、徳川家に川南新田を上納することを記載している史料が存在した。その史料は川南新田の支配人深谷清兵衛が徳川家に宛てて出したものである。このことから「徳川様の新田」とよばれるようになったと考える。

さらに、「川南新田に関する一件書類」には、江

戸時代の川南新田を描いた図面があった。その図面によると、新田中央に南北に水路が通されており、その水路は現在の日本福祉大学東海キャンパスの西側道路にあったものと思われる。その場所はすでに埋め立てられており、現況で痕跡を確認することはできなかった。

現在、日本福祉大学東海キャンパス周辺はタマネギの栽培地である。大里村のタマネギ栽培、明治23年(1890年)に大村鹿之助が北海道から種子を手に入れたことから始まる。このことは、愛知県のタマネギ栽培の濫觴である。東海市域が名古屋に近く、明治以降、西洋野菜栽培に力を注ぐ地域であった。上野村の蟹江一太郎はトマト栽培をはじめ、現在の株式会社カゴメにつながる。同じように、横須賀町大里ではタマネギ・甘藍(キャベツ)がさかんに栽培された。大田川河口の川南新田・川北新田は砂地であったため、土物(根菜)の栽培に適しており、明治40年(1907年)頃から本格的なタマネギ栽培が行われた。トマトも同様であるが、西洋料理が浸透し、西洋野菜が注目されるのが明治後期であり、タマネギ栽培とも共通することが明らかになった。

### 研究期間終了後の今後の展望

川南新田に大村鹿之助が関わっているかどうかを確認したい。それによっては川南新田が愛知県タマネギの発祥地になる可能性がある。徳川林政史研究所には未確認の川南新田の史料が存在しており、さらなる史料発掘がのぞまれる。

川南新田のタマネギの活用を考え、地域の特産物化につなげることもできる。歴史的なストーリー性を活かしている事例、タマネギ活用の事例を学ぶ必要がある。前者は長野県伊那市高遠で行っている「高遠とうがらし」があげられる。江戸時代より高遠藩で栽培されたとうがらしが有名であり、近年、それを復刻し、ブランドと販売しはじめた。後者はタマ

ネギ産地として淡路島が有名であり、近年急速にブ  
ランド化を進めている。こうした地域から学ぶこと  
が必要である。